2006. 5. 20

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

JALD 日本LD学会会報 第57号

事務局：〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9ムギショウビル3F TEL.028-649-0090 FAX.649-3318
URL. http://www.soc.nii.ac.jp/jald/

高等教育と軽度発達障害

成蹊大学文学部
牟田悦子

大学への進学希望者全員が入学できる時代が近い。現在すでにLD、ADHD、広汎性発達障害などのある学生が高等専門学校、短大、大学、大学院で学んでいるが、今後さらに増えることが予想される。問題なくすごしている人もいるだろうが、授業、試験、進級や卒業、対人関係、クラブ活動などで困惑したり、周囲から問題にされている人たちもいる。大学の学生相談室の相談対象になることも多く、現在学生相談関係者にとって「ブーム」といっていいほど、軽度発達障害が話題になっているという。

軽度発達障害のある人が高等教育を受けること自体はめずらしいことではない。LD・ADHDなどの研究での重鎮で、自らがその傾向があると開示している方々もいる。先日ある研究会でお会いした高名な動物学者が、まさに自分はADHDでしたとお話された。母上が、好きな動物の勉強をするようにとずっと応援してくれたそうだ。こうした方々はいわば第一世代といえよう。苦労されただろうが、よき時代の背景もあり、高い方の能力をうまく適合させて個性を生かす方向に発揮できたのであろう。希望を与えてくれる人たちである。

第二世代が、時代の、何事にも同じ水準を求める方向への変化のなかで翻弄され、せっかく大学に入ったのに大学生活と適合せず、十分な支援も得られず困惑している人たちであろう。学生相談などの既成の機能で対応される場合もあるが十分ではない。この世代の人の中で、自分の特性とそれにいかに対処しているか、周囲の無理解がどう影響したかについて内側から語ってくれる人たちがいる。養護学校の先生でディスレクシアのある方が、自分には文字がどのように見えるのかパワーポイントでわかりやすく説明してくれて、目が開かれる思いがした。関係者への、また次の世代へのエールであろう。

そして第三世代が、小・中学校で特別支援教育を受けて進学する人たちである。学ぶ意欲があって入学するこれらの人たちへの特別支援は、まさに大学にとっての課題である。